

Research Bulletin of English Teaching — その軌跡と再考 —

西堀 ゆり (札幌大谷大学)

2002年の創刊から10周年を迎え、当時の切実たる思いとその後の軌跡を感慨深く振り返っている。創刊号は北海道支部の15周年を記念する事業の柱として、総力をあげて取り組んだ記念論文集であった。この時の名前は『JACET北海道支部15周年記念論文集』であったが、その英語名 *Hokkaido JACET Journal No. 1* はこの号限りで消え、次号(2005年2月)からは *Research Bulletin of English Teaching No. 2* となり、その後毎年発行を続け、10周年記念の号を迎えることとなった。その間の論文提出や編集に関わった会員諸氏のご苦勞を思うと、感謝以外の言葉が見つからない。

何故名前が変わったのか?今となっては、不思議に思うかもしれない。だが、そこには、JACET北海道支部にとっては、誕生の喜びとほろ苦い思いが幾重にも重なり合っていた。丁度その時期に歩みを共にしてきた者(2000年～支部幹事;2002年～副支部長;2004年～2009年度支部長・理事)として、10周年に今一度これを紐解いて、その軌跡を確かめたい。今後どのような道を歩むかは支部の意志と総意であるが、小文が将来歩む道に一灯となれば幸いである。

その昔、1990年代頃までは、英語教育で論文を書いて発表するとなれば、自大学の紀要、いわゆる house journal、が主流であった。大学英語教育学会の紀要(*JACET Journal*)は発行されていたのだが、全国2000名の会員からすれば、その掲載数は極めて少なく、英語教育の実践研究は査読を通るのは難しかった。また、一般的に、英語教師の置かれていた立場は研究に割く時間が少なく、house journalへの論文でさえ、少ない傾向にあった。どんなに多くの学生を教え、入試での負担が莫大であったとしても、正直なところ、英語教師の研究者としての評価はお世辞にも高いとは言えなかった。

その頃、世の中では、研究業績の評価が高まり、教育業績に関してはあまり重視されない傾向が進んでいた。理系では、グローバルな規模での研究者

の移動が顕著になり、研究費の獲得競争も激しく、客観的な業績評価が必須となっていた。論文ならば、国際的にインパクトファクターの高い学会誌、引用回数等、また、外的資金の確保等、公平に比較できる尺度が基準になっていた。理系では、house journal は殆ど意味をなさなくなっていた。文系と理系の両方に所属していた筆者自身、同じ大学でありながら、自大学紀要の論文は理系では「論文業績」として登録できないと言われ、面食らったことを覚えている。

対岸の火と思っていたのだが、思わぬ逆風が文系にも吹いて来た。少子化による「大学冬の時代」の冷たい嵐であった。ポストは少なくなり、大学院を卒業した若い研究者は非常勤でさえ公募しなければならない時節を迎えることとなった。業績を上げねば、しかも、house journal ではないところで発表しなければならなくなった。海外で学位を得たUターン組も多くなり、ポストを得るのが益々困難になっていった。英語教育の実践だけでは業績にならない時代を迎えていたのであった。

丁度その時代、1986年にJACETの6番目の若い支部として誕生した北海道支部は全国大会(1991年、2001年)を開催し、しっかりとした組織作りに邁進していた。支部大会、研究例会を開催し、会員の研究発表の場を作り出し、また、各種の交流の機会を設けることに力を注いでいた。新参者としては、無事に組織を作り上げ、会員を確保することが最大の目標であった。全国大会の度に知名度は増し、会員数も増えるのが常であったので、創設当時は苦労はあっても、目標は明確であった。JACETには応用言語学という分野の広がりが強みと魅力でもあった。主要分野である英語教育では、専門の若手研究者も増え、活躍の機会は広がり、充実した成長期であった。この創立時の熱気は北海道支部『ニューズレター』No. 10、創立10周年記念号に詳しい。

その後、支部創立15周年を迎える時にあたり、組織作りのもう一段上である研究の充実を目指そうということになった。発表の場を提供するだけでなく、業績として残る形で、会員に資する貢献はできないか、時代のニーズに合わせて構想を練った。研究交流だけではなく、一段レベルの上の力は支部にあるのか?自らを問い直す機会でもあった。独自の質の高い研究が支部としての独自性を高める。地方に甘んずることなく、中央にも通じる質の高

い研究を保持する。15周年を記念するとなれば、これしかないとの熱い思いだった。

先例は魅力的に存在した。関西支部は支部としては最大数の会員を擁し、独自の紀要を発行し、独特の取組みを各種行って、全国にその名を馳せていた。1992年に支部紀要の創刊号を発行し、現在では20周年記念号を発行する大先輩である。また、なぜか北海道と親交の深かった九州・沖縄支部も、1996年に支部紀要を創刊し、国際的な交流事業等も発展させ、元気よく前を走っていた。

勇躍後に続かんと、北海道支部も紀要発行にこぎつけたが、予期せぬところで、難題が待ち受けていた。JACET本部役員会で、喜び勇んで発行の報告をしたところ、批判の矢を浴びることとなった。1970年創刊の『JACET紀要』が既に存在するではないか。学会の力が分散するではないか。確かにその通りだが、いつまで経っても査読を通らない状況では、支部会員の研究意欲を盛りたてられない。新入会員を増加させよとの本部からの指示にもかかわらず、会員数は伸び悩んでいた。何とか支部の意気を高めて、会員増につなげたいとの切実な思いを伝えたく、言葉を連ねたが、言葉は虚しく空を切っていた……孤立無援。

だが、その時、沈黙を破って、思わぬところから援護射撃が来た。わが盟友、当時の千葉元信・東北支部長が、いつもの穏やかな口調で、訥々と、「支部が発展しなくては、JACET本体の発展は無いのではないか。」と口火を切った。千葉先生は、温厚篤実、東北人の朴訥な人柄で、公平無私、正しいと信ずることには節を曲げない。黙して語らないが、いざ公平さが侵されると、闊達で明快な議論を展開、誰もが絶大の信頼を寄せていた。会員数の少ない地方支部の苦勞を交えて、訥々と説く正論は、暖かく、力強く、粘り強く、折れなかった。この時のことを今も懐かしく思い出す。学生達には、ディスカッションで説得するスキルを教え、実践してきた私だったが、初めて、「説得されない」こともあること、そして、その大切さもまた学んだ瞬間であった。

この後、支部紀要は続々と生まれた。2003年に『中部支部紀要』、2004年に『中国・四国支部紀要』、2005年に『東北支部紀要』が創刊された。本年

発行された大学英語教育学会『創立 50 周年記念誌』(2002—2011 *Fiftieth Anniversary Overview*) を見ると実に感慨深い。第 3 章「JACET の諸活動」の中に、全国 7 支部の活動が報告されているが、どの支部も支部紀要をその活動の重要な柱の一つとして位置付け、詳細に報告している。各支部が独自の工夫を凝らして、研究レベルの質的向上を目指している姿は実に頼もしい。また、全 7 支部の創刊号の表紙の写真が揃って載っているのは壮観である。北海道支部が立てた、ささやかな一波が、このようにも大きく成長したとは、嬉しい限りである。

この独自性を求めての道の始りはどのあたりであったろうか？ 思い返せば、それは 2000 年に沖縄国際大学で行われた JACET 第 39 回全国大会であった。千葉先生と私とが隣り合わせた懇親会の席上で、「北海道と東北、隣同士ですから、力を合わせて何か一緒にやりたいですねえ」と、冗談ともつかない話を始めたことに始まる。北の端の支部が何で南の沖縄でこんな会話になったのだろうか。熱い盛り上がりを見せる九州沖縄支部開催の懇親会の喧騒の中で、北方の我々は、会員数も伸び悩み、広い地域に点在する大学をまとめねばならず、先行き不安に、心細い思いをしていたのかもしれない。何か打開策はないものだろうか、そんな思いがこの案を飛び出させたのかもしれない。

この途方もない話が後年現実のものとなった。2006 年 7 月に、北海道支部 20 周年記念支部大会が東北支部との合同支部大会として、丁度中間の地、函館で開催された。独自性を求める、だが、競争し排除するのではない、手を携える発展を求めよう。英語教育にかけては、地方は後発ではない。合同支部大会シンポジウムのテーマは即決まった。レベルの高い、独自の、骨太の英語教育を有していた歴史に立ち返り、温故知新を極めよう。東北と北海道は実は 100 年以上も前に英語教育の先進地だったのだ。シンポジウムのタイトルは、そのものずばり、「北海道・東北「英語教育」事始め・・・そして今」であった。

念願の合同支部大会は成功裡に終わったが、函館山の山頂レストランでの懇親会は雨雲立ちこめ、自慢の夜景は見えそうもなかった。だが、始まる直前に、奇跡的にも、眼下の雲海がさっと道を開け、美しい夜景を見せてくれた。それまで何十回となく見た函館の夜景ではあったが、これほどまでに美

しく、心に沁みた夜景はなかった。今思えば、旅立つ盟友への素晴らしい贈り物であった。(千葉元信先生 2006年12月26日ご逝去)

独自性の更なる上に展開するのは何か、それぞれの支部は心を砕いてきた。それは国際性であった。地方が国際性とは奇異な感じがするかもしれない。だが、何事も中央集権で始まるのではなく、中央をも飛び越えて、世界へ羽ばたく独自の翼を獲得するという希望だった。いつでもどこでも接続可能なユビキタス社会が到来しつつあり、時代はこの希望を実現可能にしてくれようとしていた。紀要に限って言えば、国際的に通用する紀要が主眼だった。関西支部は2005年に支部紀要の在り方を見直し、『関西支部紀要』の支部を取り、『JACET 関西紀要』と表題を改め、2008年の第10号からは、表紙に *Jacet Kansai Journal* と英語表記を入れることになった。国際的に活動を広げていた意気軒昂な九州・沖縄支部は創刊号から *Annual Review of English Learning and Teaching* と支部の名前は無い。北海道支部の紀要も2005年の第2号から、英語名に改め、その名も *Research Bulletin of English Teaching* となった。独自性と国際性を縋り交ぜて毎年発行を続け、10周年を迎え、今日に至っている。

Research Bulletin of English Teaching の軌跡を辿ってきたが、将来はどのような軌跡を描くのか。それは一重に担い手の意識と意志による。どのような糸を縋り交ぜていくのか、楽しみである。単に継続するのではない。何を取捨選択すべきか、何を残し、何を新たに加えるか、考えることは楽しい。軌跡は過去の物だが、将来のそれは虹である。どんな色になるのか。はたまた、虹は消えるのか。未来はスリルに満ちている。実行するのは次代を担う人々であり、それを突き動かすのは時代である。若い担い手達が、勇躍果敢に、自由に歴史を創っていく姿を心から期待している。